様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０４９６

研究課題名（和文）クメール語のテンスとアスペクトの体系に関する研究

研究課題名（英文）Tense and Aspect in Khmer

研究代表者
上田　広美（UEDA, Hiromi）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：６０２９２９９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円、（間接経費）　　1,140,000円

研究成果の概要（和文）：クメール語は、日本語と異なり動詞の形式によってテンスを表さないが、近年の言語資料では、シタ、シテイタに相当する過去のテンスを表す標識とされる語が頻繁に観察される。本研究は、クメール語資料から収集した用例を分析し、動詞句の前後に置かれテンスやアスペクトを表す標識とされる語、及び、時間を表す副詞的表現について、どのような環境で出現し、どのように用いられるかを考察した。研究過程では、用例分析及び対照研究の手法について、海外研究者の協力を得た。主な成果は、雑誌論文で発表された他、外国語教育面において今後社会に還元される。

研究成果の概要（英文）：Khmer language does not represent a tense by verb forms unlike Japanese language. However past tense markers are observed in the text corpus of recent years. This study investigated the usage of the aspect markers and expressions representing the time in the modern Khmer language materials. We tried to describe the usage of these markers and expressions. In the research process, Cambodian and Thai researchers cooperated in advising on the text corpus as materials and on the method of analysis. The main results of this study were published in the journal articles and also contribute to the Khmer language education as a foreign language.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：クメール語　カンボジア語　テンス　アスペクト　対照研究

１．研究開始当初の背景

（１）背景

本研究グループ（代表者及び分担者）の所属機関である東京外国語大学は、日本で数少ない東南アジア諸言語の研究・教育機関である。とくにクメール（カンボジア）語に関しては、国内で唯一の高等教育機関である。本研究グループ（代表者及び分担者）は、これまで、所属機関の在学学生に対する言語教授のみならず、広く学外の学習者のためにも、東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」で、インターネットを利用した学習教材を発音、文字、文法、会話、語彙の各分野について整備してきた。

また、所属機関の大学間学術交流協定校には、カンボジア王国を代表する国立総合大学である王立プノンペン大学が含まれており、交流協定締結以来、学生、教員、学術成果の交換による実質的な相互交流を行ってきた。

さらに、本研究グループは、平成 19～平成 21 年度の科学研究費補助金基盤研究(C一般)「現代カンボジア文学の翻訳と研究」において、現代カンボジア文学の８作品を日本語に翻訳するとともに、日本語で書かれた自伝や歴史解説書をカンボジア語に翻訳する作業も試みてきた。このような双方向の翻訳作業の過程で、本研究グループは、両言語において、とくに、時を表す表現の差異が大きいことを再確認した。

クメール語は、類型論的には孤立語に分類され、語形変化はなく、述語である動詞句を中心とする語順によって、文の意味が決定される。動詞句の前後に付加されてアスペクトを示す標識は複数存在するが、日本語と異なり、動詞の形式によってテンスを表すことがない。動詞の表す動作や状態がどの時点の動作や状態であるかは、時を表す語句があればその語句によって、そのような語句がなければ文脈によって判断されると考えられる。

一方で、国文法としてのクメール語文法解説書では、動詞の前に、標識となる別の語を付加することで、過去、未来、現在進行のテンスやアスペクトを明示できるという説明がなされている。また、近年、とくに翻訳作品や新聞記事などの言語資料中では、外国語のテンスの表現を機械的にこれらの語を使用して置き換えていると判断される例も観察されるようになってきている。

（２）動機

本研究グループは、上述のようなこれまでの研究の過程で、もしくは翻訳作業や言語教授の経験から、クメール語の現代文において、テンスを表すとされる語の頻度が高まっていること、及び、「シタ」「シテイタ」のような、外国語の時を表す語がクメール語では機械的に翻訳されがちな傾向を認識した。このことが、本研究代表者自身も含め既存の研究者が取り上げてきた主要なアスペクト標識や、テンスを表すとされる標識について、また、直接的に時を表す副詞を付加する用例についての再考を含め、クメール語では、いかなる形式によって時間が表され得るのかを調査し、クメール語のテンスとアスペクトの体系を明らかにする本課題「クメール語のテンスとアスペクトの体系に関する研究」を着想した動機である。

２．研究の目的

本研究は、類型論的に孤立語に分類され、日本語と異なり、動詞の形式によってテンスを表すことがないクメール（カンボジア）語がいかなる方法で時間を表現するかについて、外国語教育への応用も視野に入れ、統語的、語彙的観点から調査した。既存のクメール語研究では、主に、動詞句末に付加されるアスペクト標識が重視されてきたが、近年の言語資料では、過去のテンスを明示するとされる語が頻繁に観察される。本研究では、現代語文の言語資料の収集と分析を通じ、クメール語のテンスとアスペクトについて、主要なアスペクト標識や、テンスを表すとされる標識、直接的に時を表す副詞がどのように用いられており、いかなる形式によって時間が表され得るのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、さまざまなタイプの現代クメール語資料（小説、戯曲、自伝、随筆、ノンフィクション、国語及び社会科の国定教科書）から現代語文を収集し、テンスを明示する標識とされる語の出現頻度と出現環境について調査した。言語資料の一部については、著作者の了解のもとに、頻度の確認や用例の収集のために検索可能なコーパスの構築を試みたが、クメール語が固有の文字を用いるため、一般的な検索以上の利用は制限されている。また、本研究グループによって翻訳された日本語資料も利用し、クメール語と日本語の対訳から時の表現を調査した。

調査の過程では、カンボジア及びタイの海外研究者の協力を得た。資料の選定、収集及び用例の分析に関しては、カンボジア王立プノンペン大学国文学科の専任教員であり、カンボジア国内で外国語としてのカンボジア語教育も行っている研究者２名の協力を得た。また、外国語教育への応用を視野に入れた対照研究の手法については、系統は異なるものの類型的にはクメール語と同じく孤立語であり、より日本語教育の歴史が長い、タイ国立カセサート大学日本語学科教員２名の助言を得た。

初年度である平成 23 年度は、カンボジアでの海外調査を行い、テンスもしくはアスペクトの表現が含まれているクメール語資料を収集した。また、収集した資料を分析するための参考として、現在の言語状況の中でテ

ンスやアスペクトの表現がどのように表層化されているかについて、海外研究協力者と意見交換をした。

２年目である平成24年度は、海外調査は、前年度、洪水被害のため訪問ができなかったタイの訪問を行い、クメール語よりも日本語との対照研究の進んでいるタイ語についてテンスとアスペクトの表現がどのように翻訳されているか意見交換をした。また、カンボジアでも、テンスもしくはアスペクトの表現が含まれているクメール語資料を追加収集した。

最終年度である平成 25 年度は、これまでに収集したクメール語資料から収集した用例中のテンスとアスペクトを表す表現について整理をした。その結果、分析した用例の一部を利用して、本研究グループ（代表者及び分担者）の所属機関である東京外国語大学の学部学生を対象にした外国語としてのクメール語教育のために文法学習教材を作成し、試用した。また、最終年度には、海外研究協力者３名を招聘し、本研究に対する助言を受けるとともに、日本語との対照研究、及び高等教育機関での外国語教育をテーマとする講演、研究会を東京外国語大学にて開催した。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

クメール語の時間を表す表現について、収集した用例から、文中の時を表すとされる語がいかなる出現環境に現れるのかを調査した結果、主に、過去、未来、進行のテンスやアスペクトを表す標識とされる語、及び、時間を表す副詞的表現の用法について、以下のような成果を得た。

①孤立語であるクメール語は、動詞の形式によってテンスを表すことがない。動詞の表す動作や状態がどの時点の動作や状態であるかは、「昨日」、「来年」など時を表す語句があればその語句によって、そのような語句がなければ文脈によって判断される。

クメール語の基本語順は主語＋述語＋補語であり、場所や様態を表す語句は補語の後ろに置かれるが、時を表す語句は主題化されて文頭に置かれることが多い。このような主題化は、「他の時間と対比してある時間にどのような出来事が起きるのか」という文脈で起こること、一方で、「ある出来事が起きるのがほかならぬその時間である」という文脈では時を表す語は文末に置かれること、また、単文中では主題化されやすいことがわかった。

②テンスやアスペクトの標識とされる語の用法について、国文法としてのクメール語文法解説書や辞書では、例えば、「私は 2003 年にシアムリアプに遊びに行った」「彼はクロム・ゴイの詩を読んでいる」「明日、私の子は入学する」という文に対し、動詞の前にそれぞれ標識となる語を付加することで、テンスやアスペクトを明示できる、という説明がなされてきた。そのため、外国語文中のテンスの表現をこういった語で置き換える翻訳文も観察される。

この標識となる語は、動詞の前に付加され時を明示する、という機能以外は異なるふるまいをする。過去のテンスを表す標識とされる語は、本来「得る」という意味の動詞であり、名詞を補語に取ることも、否定辞を前置して否定することも可能であるが、未来、進行のテンスやアスペクトを表す標識とされる２語には同様の用法は存在しない。

また、とくに未来のテンスを表す標識とされる語は、過去 50 年ほどの資料を調べると、以下に占める表１のように、近年、過去のテンスを表す標識とされる語が増加しているのとは逆に、使用頻度が低くなっていることが観察される。（クメール語の語彙の頻度に関する正確な統計は存在せず、本研究での頻度調査は、クメール語で書かれた資料のごく一部に対して行ったものであるが、調査協力者の言語使用意識とおおむね一致していた。）

表１．標識の頻度

過去	進行	未来	資料出版年
151	22	74	1955
144	15	110	1960
100	25	68	1960
80	23	88	1965
229	35	129	1967
49	9	14	1969
34	12	9	200?
78	20	9	2000
31	12	5	2003
62	44	9	2007

過去のテンスを表す標識とされる語については、国文法の解説書では過去のテンスを明示するとされているが、その他の先行研究中に述べられている通り、本動詞「得る」という基本的な意味から、結果が成立する確実性や新しい状態の発生を表すことを確認した。さらに出現環境を調べ、修飾節中で用いられる頻度が高いこと、「会う」、「聞こえる」、「見える」、「知る」など、一定の時間継続する動作を表す動詞と共起しやすいことを確認した。

未来のテンスを表す標識とされる語については、主語となる名詞の表す人称や共起する語句について調査をし、「間もなく」「もうすぐ」などの近い未来を表す語句と共起しやすいこと、既に開始されたり開始されることが確実な場合には用いられないこと、条件文や引用文を中心に複数の節の示す出来事間の継起的関係を明示する必要がある場合に用いられることがわかった。またこのことから、この標識は、発話時との関係とは限らず、ある出来事時と別の出来事時の継起的関係を示し、基本的意味は、「まだ起きていない

事態が起こり得る」ことだと考えられることがわかった。

進行のアスペクトを表す標識とされる語については、先行研究中では、動作主の意思でコントロールできる動作を表す随意動詞と共起する例のみが挙げられていたが、動作主の意思でコントロールできない動作を表す不随意動詞であっても、また形容詞であっても、共起できることがわかった。また、名詞修飾節中、とくに、時を表す名詞の修飾節中での頻度が高いこと、引用節中や比喩を表す節中で出現しやすいことを述べた。さらに、時を表す名詞の修飾節中での用例と、「突然」で始まる節が続く例が頻出することから、ある出来事が起こっている最中に、別の出来事が起きたことを描写する文中で、最初の出来事を表す動詞に用いられやすいことがわかった。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の成果は、クメール語文法の記述研究にも貢献するが、本研究グループ（代表者及び分担者）及び海外の協力者がすべて高等教育機関の外国語教育の現場にいる教授者であることから、日本におけるクメール語教育、またカンボジアにおける外国語としてのクメール語教育、タイにおける日本語教育の各方面において、広く社会に還元されると期待される。

また、本研究では、既存の類似研究が存在しないことから、海外協力者として、カンボジア人研究者、タイ人日本語研究者の協力を得たが、多くの助言を得たと同時に、意見交換や講演、研究会を通じて、海外研究者の日本語研究や教授法研究にとっても、刺激を与えることができたと考えられる。

（３）今後の展望

本研究の主な研究成果は、雑誌で発表されたが、その他に、日常的に外国語としてのクメール語教育活動を行っている本研究グループ（代表者及び分担者）によって、教材作成のための資料として使用されることで、社会・国民一般に対して広く還元される。

本研究の最終年度には、収集、分析した用例の一部を利用して、本研究グループ（代表者及び分担者）の所属機関である東京外国語大学の学部学生を対象にした外国語としてのクメール語教育のために文法学習教材を作成し、試用した。今後の展望としては、この試みを拡大し、本研究で明らかになった用法について、また、本研究で収集した用例を利用して、一般向けのクメール語学習書、文法書の開発を行う予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

①上田広美、クメール語の形容詞文について、慶應義塾大学言語文化研究所紀要、査読無、45、2014、159-173

②上田広美・岡田知子、クメール語の動詞句、東南アジア大陸部諸言語の動詞句、査読無、2013、76-123

③上田広美、現代クメール語の進行形について、慶應義塾大学言語文化研究所紀要、査読無、43、2012、193-209

④上田広美、クメール語の時を表す語句の位置、コーパスに基づく言語学教育研究報告７　フィールド調査、言語コーパス、言語情報学 III、査読無、2011、245-258

〔学会発表〕（計　１件）

①上田広美、日本語との対照によるカンボジア語教育の試み、国際日本研究センター対照日本語部門主催外国語と日本語との対照言語学的研究第４回研究会、2011 年 7 月 16 日、東京外国語大学国際日本研究センター

６．研究組織

(1)研究代表者

上田　広美（UEDA, Hiromi）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：６０２９２９９２

(2)研究分担者

岡田　知子（OKADA, Tomoko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：７０２９２９９３